

今週の為替相場見通し(2024年6月17日)

総括表	(円)	先週の値動き		今週の予想レンジ
		注 レンジ	終値	
米ドル	(円)	155.73 ~ 158.25	157.46	156.00 ~ 159.00
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル) (円)	1.0668 ~ 1.0852 167.56 ~ 170.13	1.0707 168.57	1.0600 ~ 1.0790 166.50 ~ 170.50
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル) (円)	1.2658 ~ 1.2859 * 198.93 ~ 201.62	1.2688 199.61	1.2500 ~ 1.2800 197.00 ~ 201.00
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル) (円)	0.6576 ~ 0.6705 * 103.09 ~ 104.80	0.6614 104.12	0.6550 ~ 0.6700 103.50 ~ 105.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 升谷颯

(1)今週の予想レンジ: 156.00 ~ 159.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

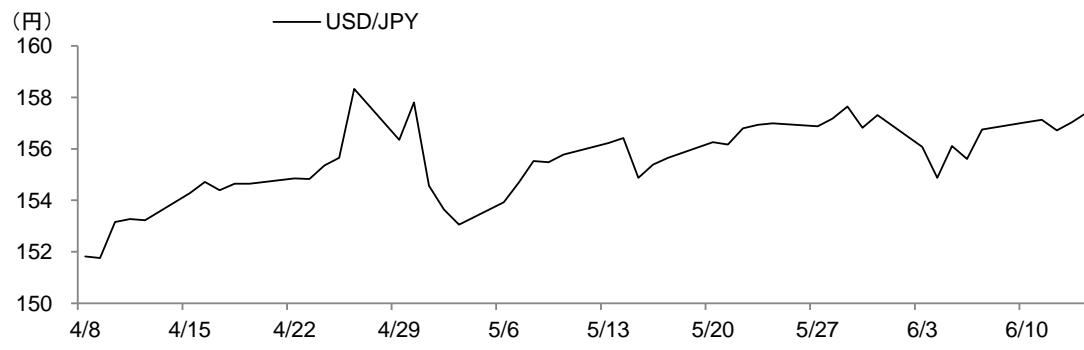
先週のドル/円は週前半底堅く推移したのち、週後半は米インフレ統計の下振れを受け弱含む場面もありつつも、日米中銀イベントを通過したのち一時158円台に上昇した。週初10日、156.84円でオープンしたドル/円はドル買い地合いが継続し157円に乗せた。11日、フランス政局の不透明感に伴うリスク回避の動きを背景に上下動しつつ、157円を挟んで方向感なく推移した。12日、米5月消費者物価指数(CPI)の弱い結果を受けた米金利低下を背景に、一時週安値の155.73円まで急落。

FOMCでは政策金利の据え置きが決定されるも、ドットチャートにおける2024年内の利下げ回数見通しの中央値が1回と示されると、タカ派的と捉えられ米金利が下げ幅を縮小し、156円台後半に値を戻した。13日、ドル/円はドルの買い戻しにより157円台に乗せた。その後海外時間発表の米5月生産者物価指数(PPI)や米新規失業保険申請件数の軟調な結果を受け一時156円台半ばに急落。ただ、翌日に日銀金融政策決定会合の政策決定が予定される中、円安リスクが意識され円売りの流れとなり、157円台を回復した。14日、日銀政策決定会合での政策決定で政策金利据え置きと7月以降の国債買い入れ減額が発表され、国債買い入れ減額の先送りがハト派的とみられてか、円売りで反応しドル/円は一時週高値の158.25円まで上昇した。しかしその後の植田日銀総裁記者会見での「国債買い入れ減額は相応の規模になる」との発言を受け円買いで反応し、157円台半ばに押し戻された。海外時間はフランス政局に対する懸念を横目に円買いとなる中、ドル/円は一時156円台後半となり、その後反発し157.46円で越週した。

今週のドル/円は底堅い推移を予想する。先週のFOMCでは、当局者らの利下げ見通しの後退や、パウエルFRB議長の「金利がパンデミック前の水準に戻らない可能性が高い」との発言が見られ、総じてタカ派的な印象を市場に与えた。他方、米5月CPI、米5月PPIはいずれも市場予想対比下振れとなり、インフレ鈍化を印象付ける結果となった。翻って、日銀金融政策決定会合では国債買い入れ減額を7月に先送りしたことを受け円売りで反応したものの、その後の植田日銀総裁会見はタカ派的と捉えられ円が買戻される動きが見られた。このような状況下、今週18日(火)は米5月小売売上高、21日(金)は本邦5月CPIの発表も予定されている。ドル/円はこれら経済指標を受けた上下動がありつつ、円売りトレンドを継続しながら上値を試していくような展開を予想する。ただし4月29日の急落水準の160円台前半に接近するにつれ、警戒感から上値重くなっていくものと考える。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/10~6/14)の値動き: 安値 155.73 円 高値 158.25 円 終値 157.46 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

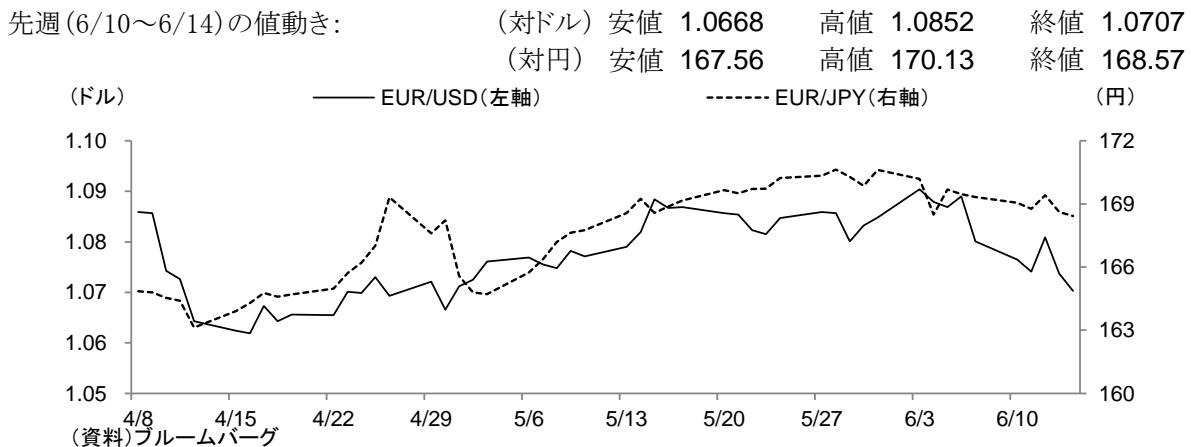
(1)今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0790 166.50 ~ 170.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは週半ばに急上昇するも週末にかけて下落。欧州政情不安が重しとなった。週初10日、1.0779でオープンしたユーロ/ドルは、前週末の欧州議会選挙にて仏与党が極右政党に獲得議席で大敗を喫する結果となりたことで仏政局不透明感の高まりからユーロ売りが強まり1.07台前半に下落。ユーロ/円は168.96円でオープンし、前週末の米5月雇用統計の結果を受けたドル/円上昇にサポートされ169.20円まで上昇したが、その後は海外時間にかけ168.30円まで下落する重い動きとなった。11日、マクロン仏大統領の辞任観測報道などを背景に欧州株の軟調推移や独金利低下に合わせユーロ売り。ユーロ/ドルは1.0720まで下落し、東京時間こそドル/円に支えられ169.41円まで堅調推移していたユーロ/円もその後168.31円まで下落した。12日、米5月CPIの弱い結果を受け、ユーロ/ドルは週高値1.0852まで急伸も、その後タカ派的なFOMCの結果を受け、1.08台前半に値を戻す。ユーロ/円はFOMC後に169.54円まで上昇した。13日、FOMC後のドル高の雰囲気を引き継いだほか、独金利低下と欧州周辺国金利の対独スプレッド拡大などが嫌気されユーロ売り。ユーロ/ドルは、1.0732まで下落。ユーロ/円はクロス/円上昇にサポートされ、一時週高値170.13円まで上昇するも、その後ユーロ売りに押され168.29円まで下落した。14日、ユーロ/ドルは仏政情不安から仏CAC指数が大幅下落する動きに売り優勢となり一時1.0668の週安値へ下落。売り一巡後NY時間には1.07台に戻すも戻りは鈍く、1.0707で越週。ユーロ/円は、日銀金融政策決定会合の結果を受け169.79円まで上昇するも週高値を前に失速、クロス/円の下落やユーロ売りに押され週安値167.56円まで急落。その後、小幅に値を戻し168.57円で越週。

今週のユーロは引き続き軟調推移を予想。欧州政情不安やECBによる追加利下げ観測がユーロの重しとなる。仏国政選挙を巡っては極右政党の台頭懸念が強まり、ルメール仏経済・財務相が「総選挙で極右が勝利すれば、金融危機のリスクに直面する」とコメントするなど先行き不安が拡大中。仏では30日に一回目の投票を予定しているが、最新の世論調査の動向を踏まえると極右国民戦線への支持が伸び極右首相の誕生が現実味を帯びてきている状況。政権交代への本格的な懸念からリスクオフムードとなりユーロ売りでクロス/円も重たい。また、今月4年9か月ぶりに利下げを開始したECBについては早期追加の利下げ観測が燐る。先週末、カザークス・ラトビア中銀総裁が「不確実性は高いが、インフレは下降傾向」「インフレが予想通りに鈍化すれば、市場の予想通りに利下げを続けることができる」と発言したほか、ラガルドECB総裁も「大きなショックがない限り、2025年後半にインフレ率2%に到達する」とインフレ目標達成への自信をみせており、9・10月にかけての追加利下げ期待は市場に根強い。今週の指標・イベントとしては週前半の独国债入札のほか、18日(火)独6月ZEW景況感指数、19日(水)ユーロ圏4月経常収支、20日(木)スイス、英中銀の金融政策決定会合、ユーロ圏財務相会合、ユーロ圏6月消費者信頼感指数、21日(金)ユーロ圏6月製造業/サービスPMI(速報値)、EU財務相理事会などを予定。

(3)先週までの相場の推移



欧州資金部 中島 將行

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2800 197.00 ~ 201.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は対ドルでは約▲0.2%下落の方、対ユーロでは約0.6%上昇、対円ではほぼ横ばいとなり、それぞれ異なる動きとなつた。対ドルの動きについて、6月12日に発表された米5月CPIが市場予想を下回る結果となつたことを受けてグローバルにドル安が進み、ポンドもそれに合わせて上昇する場面もあったが、週後半にはフランスの政治情勢を巡る混乱が意識される形で、ユーロ圏以外にも幅広く下落圧力が波及した形だ。英国の経済指標では、11日に2~4月の失業率が発表され、結果は4.4%と2021年半ば以来の高水準となった。民間部門の平均週間賃金は前年比+5.8%と過去2年で最小の伸びとなつた。インフレ圧力の鈍化を示唆するものであり、BOEの夏ごろまでの利下げの可能性が残された形だ。12日に発表された英4月GDPは前月比横ばい。4月は例年よりも雨が多かったほか、イースター休暇の3月末への前倒しの影響もあり、景気が伸び悩んだ。

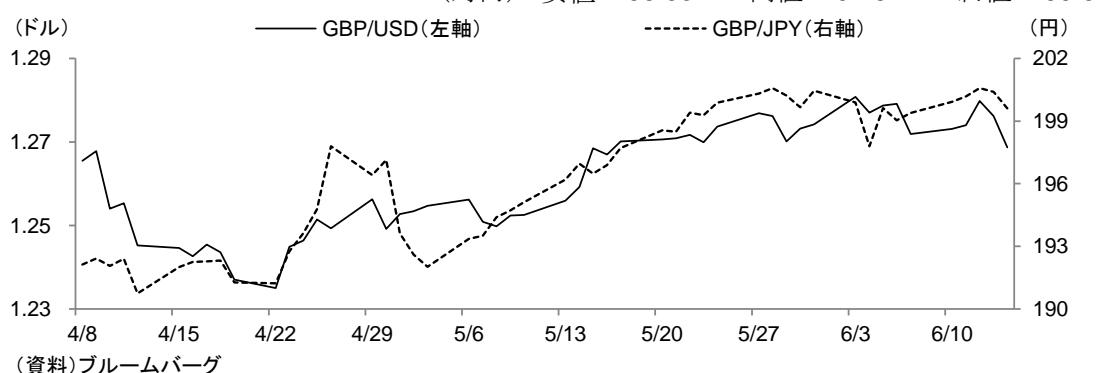
今週もポンド相場は対ドルではフランスの政治情勢を巡る不透明感が重石となろう。英国内では6月20日(木)にイングランド銀行(BOE)の金融政策発表を控える。前日に公表される5月分の英CPIの結果いかんにかかわらず、今会合では据え置きが発表される可能性が高い。4月に行われた最低賃金の大幅引き上げもあり、しばらくは賃金・サービス価格の上昇圧力をBOEは見極めようとする公算が大きい。また、7月4日に総選挙を控え、財政政策を巡り不透明感が残る。こうした中、BOEは今後の金融政策運営はデータ次第というメッセージを維持しつつ、当面の間、政策金利を据え置く姿勢を示す公算が大きい。対ユーロでは、6月に利下げを開始した欧州中央銀行(ECB)との金融政策の方向性の違いが意識される形で、ポンドはサポートされると見られる。対円でも、日本銀行の金融政策の調整スピードの鈍さが先週は改めて市場で意識された形であり、ポンド/円は底堅く推移すると見られる。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/10~6/14)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2658 高値 1.2859 終値 1.2688

(対円) 安値 198.93 高値 201.62 終値 199.61



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1)今週の予想レンジ: 0.6550 ~ 0.6700

103.50 ~ 105.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65台後半から0.67台まで大きく振れた。10日、前週金曜日の堅調な米雇用統計を受けた豪ドル安の流れから、0.6580近辺で取引開始。シドニー休場で薄商いの中、じり高の展開となり0.6610近辺で引け。11日、材料難の中、0.66台前半で小動き。12日、この日発表された米5月CPIが前月比、前年比ともに予想を下振れたことを受けてドルが大きく下落。豪ドルは0.6610近辺から0.6705まで上昇した。その後、FOMCが政策金利を5.25~5.5%に据え置くことを決定するとともに、同時に発表されたメンバーによる経済・金利見通しでは、年内利下げ回数について1回(▲25bp)と予想。3月発表のドットチャートでは年内3回の利下げを予想していたことから、タカ派的な修正とさえられ、ドルは買い戻しの動きに。この流れから豪ドルは引けにかけて売られ、0.6660近辺で引け。13日、この日発表の豪5月雇用統計は就業者数が予想を上回り、失業率は前月から低下。労働市場の堅調さを示す結果となつたが、来年以降の利下げを想定する市場にとっては想定の範囲内とのことで大きな材料とならず、相場への影響は限定的だった。NY時間に発表された米新規失業保険申請件数が予想を上回り、同時に発表された米5月PPIが予想を下振れたことで、ドル売りが持ち込まれ、豪ドルは一時0.6675まで買い進まれたがすぐに反落。その後も頭重く0.6640近辺で引け。14日、特段材料のない中、売りが優勢。NY時間に入り、米5月輸入物価指数が昨年12月以来の下落に転じたことで、インフレ鈍化が意識され米国債利回りが低下。米6月ミシガン大学消費者マインド指指数が予想外にさえなかつたこともドルの頭を押さえ、豪ドルは小幅買い戻されて0.6615近辺で越週。

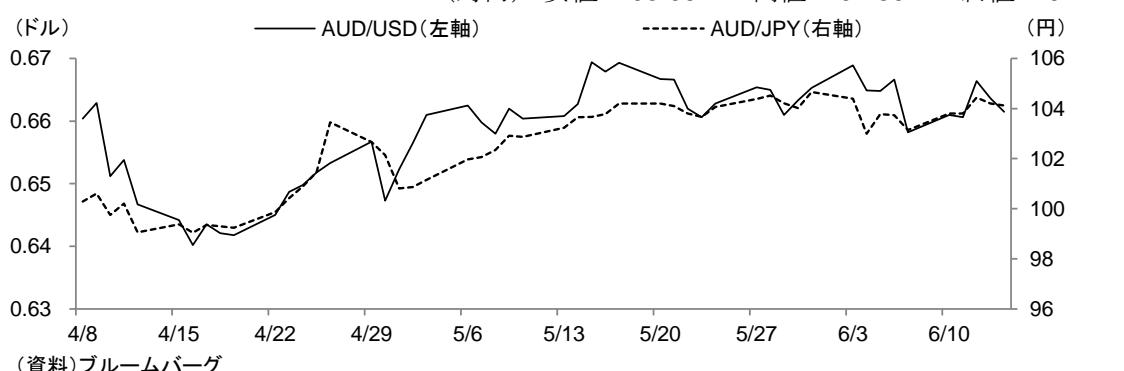
今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。今週は、17日(月)中国5月小売売上高、中国5月固定資産投資、18日(火)RBA会合、米5月小売売上高、20日(木)BOE会合等が予定されている。RBA会合では政策金利据え置きが広く予想されているが、4月に発表された豪1~3月期CPIが予想を上振れ、その後発表された豪月次CPIも2か月連続上昇を記録する中、市場はRBAのタカ派回帰を警戒している。利上げバイアスの復活を示唆するような声明文の内容やブロックRBA総裁による記者会見の発言に注目が集まる。但し、基本的にはデータ次第との姿勢は変わらないことが予想され、RBAの判断に関しては豪4~6月期CPI(7月31日発表)が鍵となろう。この他、米5月小売売上高に関しては、さえない内容だった前月から再び強含むことが予想されており、そうなれば豪ドルは短期的に頭を押さえられる可能性がある。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/10~6/14)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6576 高値 0.6705 終値 0.6614

(対円) 安値 103.09 高値 104.80 終値 104.12



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。